

見方・考え方と高次の資質・能力を踏まえた個別の内容の選択・精選を巡って

上智大学 奈須正裕

1. 見方・考え方と高次の資質・能力

- ・文部科学省が用いてきた「各教科等の特質に応じた見方・考え方」の英訳は a discipline-based epistemological approach である
- ・1960 年代にブルーナーが主導した「学問中心カリキュラム」が discipline centered curriculum であることからわかるように、discipline とは学問分野、しかも対象や領域よりも、その分野に固有な原理原則や独自の方法論を強調する表現である。また epistemological とは認識論的、つまり対象世界をどのように見るか、また対象世界とどのように関わり、知識や価値や美を生み出すかという意味合いになる。したがって a discipline-based epistemological approach とは「ある学問分野に独自の方法論を基盤とした認識論的アプローチ」といった意味になると考えられる
- ・多くの各教科は、学問・科学・芸術などの文化遺産、いわゆる「親学問」を背景として成立している。すべての文化遺産は、人間がよりよく生きる、つまり well-being を目指して生み出されてきた知恵の体系である。学校における各教科は、そこからの選りすぐりの教授を通して、子供たちが人生で出会うさまざまな問題の解決に際し、それらを活用して有能（competent）に振る舞えるようにすることで、well-being の実現に資することを目指してきた
- ・この目的のために各教科で教えている個別の「内容」＝文化遺産からの選りすぐりの知恵は、すべて先人が特定の「見方・考え方」を働かせ、対象世界に有能にアプローチした成果として得られたものである。したがって、その知恵を学ぶ際に、子供たちもまた先人と同じ「見方・考え方」を働かせて対象世界に関わることは、先人が知恵を生み出した筋道や方法を身を持って経験することにつながる。このことは、深い意味理解や記号接地をもたらし、その知恵の人生における問題解決への適切な活用を促す
- ・特定の教科で教えている個別の「内容」は、表面的には多岐にわたるが、そのすべてが特定の「見方・考え方」を働かせた成果として得られたものである以上、当然のこととして、その教科の本質につながる共通性をもつ。そこに注目していけば、表面的には大いに違って見えるものが、同じ原理の異なる現れに過ぎないことに気付くである

う。この多くの内容を統合的に整理しうる原理が「高次の資質・能力」である（これまでの審議では「中核的な概念等」と呼称していたが、今回用語が整理されたもの）

- ・先人が **well-being** を目指し、特定の「見方・考え方」というメガネをかけ、技術をたずさえて対象世界と対峙したからこそ、今現在、各教科で教えている「内容」が存在している。また、それがゆえに「内容」には大いなる共通性、一貫性があり、かつては教科の「系統」などと呼ばれてきた。それを概念として抽出し、教育課程編成の中心に据え、膨大な「内容」の構造化を図ろうというのが「高次の資質・能力」の発想であると考えられる。もっとも、考え方それ自体は新しいものではなく、ブルーナーの「構造」のリバイバルと見なすこともできよう
- ・「高次の資質・能力」を中心に特定の教科の「内容」を整理・統合・系統付けることは、教育課程の基準や教育課程の作成等において、その教科の「内容」の構造化に寄与する。また、教育課程の展開、すなわち授業の計画と実施に際して、教師も子供も「高次の資質・能力」を意識することで、日々学んでいる内容が個々バラバラのものではなく、相互に関連づいたものとなっていく。ついには、子供たちはその教科の学びを全体として俯瞰的に眺められるようになり、その教科の本質をつかみとるであろう
- ・このように「見方・考え方」の存在が「高次の資質・能力」を生み出す。したがって、改めて各教科の **discipline** に立ち返り、その教科ならではの固有な原理原則や認識論的な立場を確認・共有することが、まずは重要ではないかと考える。特定の教科が教育課程全体、また子供たちの有能さ（**competency**）の発達に際して果たしうる、果たすべき「教科の任務」を明らかにするためにも、意味のある作業と言えよう
- ・ここで悩ましいのは、「親学問」に依拠しない各教科等である。たとえば総合的な学習や特別活動は、特定の **discipline** を編成原理としてはいない。これらにも「見方・考え方」は想定しうるのか、その場合の根拠が何かは難問である。現状では、より現実的で実践的な問題解決に際して「各教科等における見方・考え方を総合的に活用して」という位置づけがなされており、それなりに納得できるが、他教科の「見方・考え方」とはやや異質であるとの感は否めない。また、社会科は「見方・考え方」を地理・歴史・現代社会の3つに分けている。**discipline** という点からは大いに納得がいくが、同時に社会科という教科における統一的な編成原理をどう考えるのかが問われる。さらに、幼児教育における「見方・考え方」も設定されているが、学校段階にも「見

方・考え方」を想定しうるのか、そうであれば小学校や中学校にも設定しないのはなぜかなども含め、再考の余地があると思われる

2. 高次の資質・能力を踏まえた個別の内容の選択・精選

- ・教育課程の基準の策定や教育課程の編成に際し、すでに多くの国や地域で「高次の資質・能力」は広く用いられている。big idea, central idea などと呼ばれているが、その記述の仕方や水準はさまざまである。教育内容は本来的に重層的な構造を成しており、どの水準を中核的とするかに絶対的な正解はないと考えられる。むしろ、教育内容が重層的であることを明確に意識し、それを丁寧に記述する中で教育課程を編むことが大切である。その作業の中で、どの水準を「高次の資質・能力」として抽出し、どの水準を「個別の内容」として記述すべきかは、次第に明らかになってくるであろう
- ・その上で一つの行き方は、機能的に考えて、どの程度の水準のどのような記述とすることが、教育課程の基準の策定、さらに各学校における教育課程編成や授業づくり、また教科書等の作成において、より有用性が高いかを幅広く総合的に考えて判断するというものである。諸外国の事例なども参考にしながら、しっかりとした議論を進めるとともに、どこかでは思い切って決断を下す必要があると考えられる
- ・「高次の資質・能力」を各学校における教育課程編成や単元構成、授業づくりなど、より具体的な作業につなげる際に用いられてきたものの一つに「本質的な問い」がある。その教科なり教科の中の特定の領域の学びに際し、一貫して問い続けられるものであり、単元のパフォーマンス課題作成のよりどころにもなる。多くの場合「本質的な問い」は先人が対象世界に対して発してきた問いと同型であり、当然のことながら「見方・考え方」や「高次の資質・能力」と照応関係にあると考えられる
- ・「高次の資質・能力」の感得をこそ各教科等における最重要の目標と考え、授業時数等の限られたリソースの中でその実現に資する教育課程の基準を策定すると考える時、個別の「内容」の選択・精選はどのような原理に沿って進められるべきか。たとえば、次の二つの基準によると考えることもできよう。基本的には、二つの基準の双方をも満たすことが要件である

①その「内容」の習得それ自体に内在的な価値があること

②ある「高次の資質・能力」を感得し深めるのに必要十分なイグザンプルであること

- ・①は教育課程の基準である以上、当然のことであり、これまでもしっかりと吟味されてきた。一方、②はあまり馴染みがないであろう。しかし「高次の資質・能力」の側から眺めた時に、似たような「内容」が多数並んでいることは、限られたリソースを効果的に活かすという観点からは得策ではない。「内容」の選択と精選において問われるべきは「高次の資質・能力」を感得するのに必要十分なイグザンプルの数とバリエーションである。先にも述べたように、表面的には大いに違って見えるものが、実は同じ原理の異なる現れであると気付けることが重要であり、そのようにして関連付いた複数の「内容」を整理・統合する拠り所として、どこかの段階で「高次の資質・能力」を子供にも明らかにそれとわかるように明示的（explicit）に指導し、さらにその先で学んだ「内容」をも統合し続け、ついには子供自身の手で新たな学びを自在に統合できるようになることが望まれる
- ・このことを考える上で興味深いのは「学問中心カリキュラム」が活況を呈していた1960年代のアメリカで、BSCS（Biological Science Curriculum Study）が開発した高校生物の教科書であり、表紙の色が異なる3種類の教科書が同時に作られた。ブルー版は生化学、グリーン版は生態学、イエロー版は細胞学をそれぞれ基盤としており、当然それぞれに盛られる「内容」は大きく異なっていた。東京大学の教育心理学者であった東洋は、テキスト開発直後の1964年に開発の中心であったグローブマンを訪問した際のことを、後に次のように述懐している。

「“3つ作ったが、代表者としてはどれがいいか”と聞き、本音を言ってもらおうと思いましたが、“3つともそれぞれいい”という答えでした。そして、ただどれも混ぜてやってはいけない、ブルーならブルーでというように、どれでもいいからひとつで一貫して使ってほしいと言っていました。これは科学、生物学が進歩していくのは基本構造があって、そこから枝葉が分かれ茂っていくものだ、この基本構造をつかませたい、そしてそれぞれに構造が入っているので、別な版を混ぜるとそれが見えなくなってしまうから、ということでした」（東洋『教育の心理学』有斐閣、1989年、261頁）

- ・先にどの水準を中核的とするかに絶対的な正解はないと述べたが、「高次の資質・能力」の十全な感得に資する「内容」の選択・精選も同様であると考えられる。ただし、このエピソードが示唆するように、一貫している必要はある。すると、あらためてこの

教科のレゾンデートルは何か、しっかりと議論し、共有することが不可欠である。このことは「教科の任務」の明確化にもつらなるであろう。